

改裝復刻版
復原された古事記
解 説

後 藤 春 吉
副 島 羊吉郎

改装復刻版 復原された古事記・解説

昭和63年 3 月 1 日 © 1988

発行所 復原された古事記刊行会

〒 104 東京都中央区京橋 2-4-12

第一生命ビル 804 A

前波 潤子事務所内

電 話 (03) 272-3841 (代)

FAX (03) 272-8379

モリモト印刷株式会社 印刷 製本

改装復刻版 復原された古事記 解説

後 藤 春 吉

ま え が き

太平洋戦争以前の、学校教育での日本史の古代は、古事記と日本書紀とによって、その全部が真実の歴史であるかのように教えられ、そして学ばされてきた。ところが、戦後の学校教育は、日本史の古代を、文献中心の歴史から、考古学を主軸とするものに変更した。したがって、日本史の起源は、日本国という国家意識の形成の起源ではなくなり、日本人というものの形成されていく歴史をものがたるものとなった。今日の若い学徒は、縄文式文化や弥生式文化については、発掘された遺跡や遺物に即してよく知っているが、記紀に書かれている神話や伝説や物語については、あまり関心を持たない。そこに書かれている文章の中から、真実の歴史を探り出す意欲を持ち、研究に打ち込む人はあまり多くないようである。いうまでもなく、考古学は、史学の基本背景の一つとして厳存するものではあるが、そのみが万能視されてはなるまい。どのように考古学が進歩しても、それだけで国家や社会の形成されていく過程の全実相をとらえることはできないだろう。それができるのは、やはり人間の手によって書かれたものにたよらなければなるまい。

ところで、古事記の文章の真実の意味とは何か？

すでに30年以上もまえのことになるが、私は「古事記の謎」と題して、故池田勇人首相の宏池会機関誌『進路』の昭和31年4月号に小文を掲載したことがある。又その直後これを読んだ故芦田均首相から、自分の機関誌に転載したいとの希望があり、承諾したところ、すぐ翌月の『東京だより』昭和31年6月号と7月号とに2回にわたり、この文章がそのまま転載された。この拙文の内容は当時ベストセラーとなっていた安田徳太郎博士著『万葉集の謎』に刺激、誘発されて『復原された古事記』という研究書の存在を紹介、解説したものである。

この『復原された古事記』の著者故前波仲尾先生は、私の卒業後に私の母校満洲教育専門学校の校長をされた方であるが、このたびこの書の改装復刻版刊行にあたり、著者の御令息^{まえばじゅんし}前波潤子さんから本書のガイドブックふうのものとして、私の小文を使いたいという御希望があったので、ずいぶん昔に書いたもので少々うしろめたいが、上記の二誌に掲載した拙文のなかから、ガイドとなるように思われるところを抜粋して、次に掲

げることとした。

『復原された古事記』の紹介

1

『万葉集の謎』が非常な反響を呼んだ理由は、それが従来の研究と全く出発点を変えて、「外国語で書かれている」という着想にあると思われる。ところが、同じような方法で古事記が、ずっと前に、天才的な民間の一老学者によって研究せられていた。その人は、数年前、83歳の高齢で物故せられた、元満洲教育専門学校長の故前波仲尾先生で、然もその研究の一部が、20年近くも前に、『復原された古事記』という菊版248頁の横書の書物として印刷せられ、現に私の手許に一冊だけ保存せられている。ただ大変残念なことに、この本の自費出版を計画せられたのが戦時中であつたために、我が「国体の尊厳」を傷つけるものとして当局から解版を命ぜられてしまった。幸にも、先生が絶版を惜んで、自家用として30部だけを秘かに印刷してお宅の押し入れに隠して持つて居られたので、私は偶然お宅に伺つた機会に、そのうちの一冊を直接いただくことができたのである。

前波先生の研究によると、古事記は、その上巻建国創業の所はスメル語で、それ以後の民族開張の所はチュルケ語で書かれているとして、その主要部分について、一々これを原語と対照して、音訳と意識を併わせつけられたのが『復原された古事記』である。

私はこのことを、『万葉集の謎』一読後、直に安田博士に相当詳細に知らせ、且つ、出来得れば同氏の斡旋で、日の目を見ずに空しく死産したこの『復原された古事記』の再出版ができないかを問い合わせたが、同氏は古事記も万葉集と同じくレブチャ語で書かれたものであると信じて研究中であるとのことであつた。いずれそのうちに『古事記の謎』として発表になることと期待しているが、(註。その後間もなく『天孫族』の書名で刊行された)次に『万葉集の謎』の中で、少しふれておられる前記の古事記に関する点だけについて、『復原された古事記』の内容とどう違うかを簡単に比較してみよう。

2

その前に付け加えておきたいのは、前波先生が、古事記がスメル語とチュルケ語で書かれていることを発見せられた経路である。

先生の元来の研究目標は東方史、つまりシナの古代史であつて、その出発点となつたのは、シナ古代の神話的人物である堯舜禹の一族が実はアフガン地方に発祥するスメル語を日常語としていたスメル族——苗族の一つで、古史には烏孫^{うざん}とあるものであるこ

と。又チュルケ族所謂、突厥族は、シナ史の蚩尤^{シ ヱ}または祝融^{シ ヱ}、周の嶽犴^{しう い}、漢の匈奴^{しう と}と共に一つの族類で、史記以前の古書の中には、この二族の言葉で書かれたものが多く、それを読み解くことによつてはじめてシナ古代史の真相を知り得る、ということであつた。

そして、この東方史の研究の結果が、同一民族が我が国へも渡來して、天孫族渡來以前の南九州の先住民となつた事実が明らかになり、その地名や人名や遺俗等を手がかりに、終に古事記そのものも、彼等の言葉で書かれたものであることを発見し、これを本來の姿に還元して読み解かれたのである。

兩 説 の 比 較

1

(1) 『万葉集の謎』にいう第一の波

グマ(熊襲)クメ(久米)についてであるが、『復原された古事記』によれば、熊襲^{くまんしう} Kuman-Siv^{ちゆるけ}は突厥族で、シナ大陸を経て我が薩摩の久米^{くま} Kuman に渡來し、前住の諸苗(後述)を或は役属し、或は大隅へ駆逐して、クマン・シヴのうちの久米部は、熊本^{くまんしう}の球磨川地方へ、シヴ部は、薩摩^{せんま}の川代河上に居ついた。ここが今の隈之城で、土地の人はそのままの発音でクマンシウと云つてゐる。又、野依という村も残つてゐる。Noyon は「王子」のことで、同族の王子にその地方を治めさせたのであろう。土地の人は今でも、野依をノヨンといつてゐる。

そこから、大隅の霧島山下に進入して、その山を「襲^{しう}の嶽^{たけ}」Siv-tag といい、隣の山^{からくにたけ}を韓国嶽^かといつた。これは、Kara Kul tag で「乾^かれた湖^{うみ}」で、火山湖の意味である。

遺俗を示すものとしては、今に残る有名な「天^{さかほこ}の逆鋒^{さかほこ}」で、これは、彼等突厥族^{ちゆるけ}が、征戦^{かどで}の門出^{かどで}に行ふ慣習で、逆さに劍を地にたてて勝利を祈る行事の一つである。

このチュルケ族より以前に、やはりシナ大陸を通つて、南九州に渡來し、先住してゐたのがスメル族——シナ史にいう三苗である。

このスメル族の由來をみると、もともとバビロニア文化を作り上げたものは、アラブ出のアッカド族とアフガン国人のスメル族の二つで、お互に抗争し、融合したが、このスメル族がバビロニアの滅亡に際して、その末期の文化を北シナに持つて來て流布した。これがシナ史にある堯舜禹族である。この種族^{さうるめやを}を三苗^{さうるめやを}といつたのは、Saur-mhöt に漢字をあてたので、もとの意味は「湖^{さうる}の苗^{めやを}」で、はじめ黄河の上流、青海の辺に居たからで、これが突厥族^{チュルケ}に追われ^{チュルケ}齊魯^{チュルケ}のあたりに逃げこみ、今度はシナ族の迫害にたえかねて、海^{めやを}にのがれ、遂に我が薩摩^{めやを}の坊津^{ぼうう}にたどりついたのである。苗^{めやを} Mhöt は又 Bhöt ともし

つたので、彼等が渡來して居ついたところを坊津^{ぼうつ}といつて、古代における大陸への交通港として栄えた。

それからだんだん内陸に進入して先住したが、彼等は自らの地方を設馬^{さるめ}といつた。サルメは Saur-mhôt の対字で、後に薩摩^{さつま}という字を用いるようになったのである。

従つて、古代のこの地方には、彼等によつてスメル語が話され、バビロニア文化が伝えられていたので、普通考えられているほど無智蒙昧の社会ではなかつたと思われる。

この苗族居住の遺風で今も残っているもののうちの面白いものを一つ、二つあげると、鹿兒島附近に、ジャンボという串団子の名物がある。ジャンボとは、スメル語で「王」の意味で、シナの史書には賛普^{じやんぽ}又は西王母^{じやんぽ}と書かれている。これは、苗種の王族が突厥族に追われるまで、一時居住していた土地の名称が、名物の名として残つたのであろう。

そのジャンボの近くに、もう一つ、土地の人が「うまんまら」といつている赤黒い太い餅の名物がある。「馬^{うまんまら}の陽物」の意味に解せられていると思うが、これは中国にもあつて「木牛・土馬」などといつているが、その実、堯舜族や苗族のみに特有の風俗で、男が女に結婚の申し込みをする際に、男は自分のものを、そのままの形に土を捏ねて作つてそれを先方に送る。所謂「納吉」で、女の方はその大小形態を見て諾否の返答をする。これが「納徴」である。薩摩の「うまんまら」は、この遺風の一物が名物として残つたものである。

以上の例示から観ても、『万葉集の謎』に云う日本への渡來第一波は、原マレー族ではなく、大陸渡りの苗族^{すめる}と突厥族^{ちゆるけ}で、その渡來経路にしても全く説を異にしている。

(2) 第二の波については、両者の説がほぼ一致していて、『復原された古事記』においても、さきに北九州に足溜をもつた海国^{わたつみ}の黒人種である大黒 Gug や小黑 gig が漸次南下して、上記の苗や突厥と抗争して、相当に勢威を張つていたことが記されている。

(3) そこへ第三の波である天孫族が、本土での黒人の叛乱を避けて、この南九州に渡つて來たものであり此点でも一致している。

さて、以上述べたことを要約して当時の我が建国の地南九州の状況を概観すると、天孫ニギが一族を率いて薩摩^{あひら}の始良に到着してみると、そこには、先住の苗やチュルケや大黒、小黑といつた各種族が、それぞれの言葉を話し、相争いながら雑居していた。そうした土地へ乗り込んできた後來の天孫族はどうして地歩を築いたであろうか？『万葉集の謎』の49頁には、

「紀元後に南九州にやつて來たかれ等天孫族は、べつに侵略軍として武装して日本に上

陸したのではない」と云っているが、その方法は、上代一般に行われたように、所謂「招撫^{ことむけ}」たのであろう。「ことむけ」は「媾和」で、現今の「講和」とはちがつて、他民族の女を妻妾として、自分の子を生ませ、混血融和することである。スメル語の Kud mug^{ことむけ} は、mug（女陰）を Kud「万事よろしく始末する」ことを意味する。

ニニギノ命が日向で、先住民である国ッ神大山津見の女コノハナノサクヤヒメに子を産ませているのなどが、この「ことむけ」の一例であろう。

2

長くなるので、サルダヒコとウズメの話については結論だけを簡単に述べよう。

(1) 猿田（彦）。チュルケ族で、中央アジアの西海^{いせのうみ}の辺、サルド Sard 部の種族で、相当インド人の血を混え、その皮膚は赤黒く、その鼻筋^{はなすじ}は通つて高かつた（今に残る神事では、その風貌を一層強化している）サルド人は天孫族より前に薩摩に渡來して、川代の河上、佐田里に居つた。我国ではサルダともサダとも云っているが、共に Sard を両様に訳したのみである。「象」のことではない。

(2) ウズ（メ）。白面の細女^{うずめ}は Udz か Udzi の苗族で、シナの史書には烏孫^{うさん} Udzan と対字している。中央アジアでは、サルドの隣に住んでいた苗族で、最初に薩摩に渡來していたが、後から來たチュルケ族に敗けて、或者は臣従し、或者は大隅地方に逃げていた。ウズメがサルダヒコとニニギの交渉^{きょうしょう}のとりもちをしたり、ウズメがサルダを伊勢まで送り、後に同じ姓氏^{かばね}を称したのは、両種族の媾和と混血融和の事実を示しているものと推測される。一人の「巫女^{みこ}」のことではない。

(3) ヤチマ（タ）三苗^{さうめやを}の居た地が、その発音のまま設馬^{さるめ}という字をあてて地名となつた。設馬を後に Jazma-na とよんで、八衢^{やちまた}の字をあてた、そのタは na（国）の誤で、J はヤともサともよまれる。つまり、ヤチマ・タは「サツマの国」のことであり「宿場」を意味するのではない。

結 論

1

わが建国創業当時に、その舞台となつた南九州地方には、こうして民族的には、渡來順にスメル族、チュルケ族、黒人族が相争いながら混住し、そこへ一番後から天孫族が割り込んできた。

文化的には、従つて大陸を経てきたバビロニア文化と、インドを経てきた、安田氏の研究になる、ヒマラヤ——インド文化という二つの流れがあり、話される言葉も、スメ

ル語とチュルケ語という前者の系統に属するものと、レプチャ語とチベット語及びサンスクリットという後者の系統に属するものとが並び行われていた、と考えるのが妥当ではあるまいか。

又前二者は、レプチャ族がインドを通つてその文化を身につけてきたと同様な意味で、当然その通過地であつたシナ文化も取り入れていると見るのが穏当で、今でも鹿児島地方の制度や風習にそれが残っている。安田氏が、

「日本古代文明は中国文明とは関係なくどこまでもインド文明の延長であつた」

と断定しているのは少し強気過ぎはしまいか？ 此点は漢文で書かれた日本書紀は論外としても、古事記や万葉集が、仮りにその音のみを借りたのであつても、漢字によつて表現せられている点を併わせ考えても、どうもそう思わざるを得ない。

2

次に、この雑居抗争時代に、どの種族が主導権を握つていたであろうか？ 私の感じだけでいえば、色々な事情を綜合して、武力的に一番狂暴というか強かつたのは所謂第二波の黒人種でなかつたろうか？ 安田氏も、「インドの賤民階級。ヒマラヤから來た食いつめもの」と書いておられる。次は、古事記に容貌魁偉な男性の形で現われているサルダ彦のチュルケ族であつたろう。だが、逆に、文化的には、白面の優しい女性の姿を仮りたウズメのスメル族が最高で、後來の天孫族は、素質的には一番優秀で、文化的にも最も新しいものを身につけてはいたが——そして、その力によつて、後には、日本全土の覇者となつたが——何しろ新参者ではあり、南九州では大した勢力を持ち得なかつたのではないか？ そうでなければ、せつかく居ついた温暖の地を捨てて、早々に未知の大和地方へ再度の大遠征、大移動の冒険をしなればならなかつた理由が判明しない。然も、その大和入りにおいても、アイヌを含むその地の原住諸族のために幾度も敗戦の苦痛を味わい、九州で和解連合して共に遠征したチュルケ族の久米部の武力に頼つて、やつと大和に落ちつけたわけであるから、元來武力的にも充分な力を持つていたとは考えられない。

こうした点から見て、古事記の建国創業の史実が、当時文化的に最優位にあり、且つ、最古の住民であつたスメル族の言葉で書かれている理由が判然とする。そして、大和入り以後の史実が、天孫族と共同行動して、その軍事力の中心となつた久米部の言葉であるチュルケ語によつて書かれるようになったのも当然理由のあることである……。

3

ところが、大和地方の征戦も一段落して、次第に秩序が整つてくるにつれて、民族と

して質的に優れ、且つ、当時の世界最新のハイカラ文化を身につけた天孫族の優位が次第に確立されていったのも自然の勢であり、従つて、古事記以後に出来た万葉集が、彼等の言葉であるレブチャ語を主たる言葉として表現せられた（と安田氏のいう）のも首肯出来ないこともない。

一方、数々の闘争と「^{ことむけ}媾和」によつて、各種族の血も次第に混和融合せられ、それにつれて、生活様式や文化も統一せられ、言葉も漸次並用から混用に、そして終に「大和民族」という一つの民族「大和ことば」という一つの言葉ができ上り、後にはそれを発音通りに表現する為に、カナが作られたとするのが、一番自然な考え方のように思われる。

或は、民族の血や言葉が、そんなに短時間に簡単に融合統一されるものかと思われるかも知れないが、この点は、現在のわれわれの日常の見聞や経験とひきくらべて考えてみるとよく諒解されると思う。終戦後僅か万単位の米軍がわが土に一時的に進駐して、近々10年の間に、どれ程の混血児が生まれ、カタコトの日米混血語が話されるようになったか？　これが、日本の総人口の1割か2割に当る1千万、2千万の米国人が、それも日本に永住する決心でここに軍事的支配力と高い文化をもつて住みついたとしたらどうであろうか、おそらく50年か100年の短期間に、日本人口の半ばは混血児となり、われわれの日常語も、日米語の並用からいつの間にか日米語混用となり、やがて此土に、一つの混血の新民族、新国語が生まれるとは想像できないであろうか？　おそらくこの想像は、相当以上の現実性があると思う。まして、大和地方を中心とする狭い部族社会で、人口も少い上代においては、その混融も一層早く行われたであろうと考えるのは、もつと自然なことではあるまいか。

なお、これは一つの仮定であるが、スメル族もチュルケ族も、そして安田氏の所謂モン族も、その発祥の地が相互にそう遠いところではなく、いずれもインドに近いその西方か北方であり、彼等の故土において、彼等の祖先の間に、既にいくらかの交通があつたものと仮定すれば、その文化や慣習や言語においても、当然何らかの共通な、或は類似したものがあつたことと考えられ、日本渡来後における相互の混和統一も、それによつて一層容易に且つ急速に進んだことであろうと想像される。ウズメが、サルタとニニギの間のとりもちをしたり、後にはサルタと同じ^{かばね}姓氏になつたりする神話もこの三種族の接触混融の状態を示していると考えてもよい。

4

そこで結論として云えることは、わが国語が、上古以來ただ一つの民族語である「日本語」より無かつたと頭から決めてかかつて、何でもかでもそのみに頼つて解釈しよ

うとする態度は偏狭であつて、既に『復原された古事記』や『万葉集の謎』のような研究が存在する以上、賛成するにせよ、反対するにせよ、或は好むと好まざるとにかかわらず、齢くとも我が民族の淵源に関心をもち、祖先の言葉と歴史を研究しようとする人々は、これらの著述をきっかけとして、従来とちがった立場からの研究にも手をつけるようになれば我国の歴史の真の姿を理解するためにも、又、古代世界文化の華であつたバビロニア文化やインド文化が、我が土において如何に開花したか、従つて古代における世界文化と日本文化とのつながりを明らかにする上からも、至極有意義なことであると考える。

私はこうした意味からしても、この面の極めて学問的な真面目な研究の第一着手の書としての『復原された古事記』が、公表されずに空しく埋もれていることなく、良心的な出版業者の手によつて、一日も早く再版公刊され、広く世界の学者によつて研究論議の対照とされる時が来ることを切に待望している。（昭和31年「進路」4月号 所載）

（註）

その後古典を従来とは別の言葉で読んだ例としては、

（1）『日本語の悲劇』（朴炳植著・情報センター出版局）では、「かつて日本語と韓国語は同じ言葉であつた」として、記紀中の一部を韓国語で読んでいる。又、最近テレビ放送で万葉集の歌のいくつかを韓国語で読む研究グループが紹介せられた。

（2）『古琉球語で解明する邪馬台国と大和』（由良哲次著・学生社）では、「古倭語と琉球語との同祖系関係」を利用して、魏志倭人伝に記された21の国名を読解している。次に、

（3） 現在までに公刊された書籍で『復原された古事記』の内容を紹介している唯一の本は、『謎の出雲帝国』（吉田大洋著・徳間書店）で、その24頁から60頁までを、この書からの引用と紹介に充てている。因みに、著者は、前波先生が校長をされていた満洲教育専門学校の卒業生（3期生）である吉田龍馬氏の令息であるのも奇縁というべきであらうか……。

追 記

次に本書の著者前波仲尾先生の間人像を併わせて次にご紹介したい。それには直接の資料として、私に与えられた先生のお手紙2通をみていただくのが適當だと思う。先生のお人柄を知るのには、千万言の紹介の言葉にまさる何よりの資料だと思われるので。

前波先生の手紙

は し が き

『復原された古事記』の著者故前波仲尾先生については、私が昭和21年8月、文字通り無一物で満洲から日本に引き揚げて来て以来、故先生からいただいた2通の手紙が今手許に残っているので、直接に先生を知っていただくには何よりの資料と思い、私信ではあるが、独断で公表する。

第一の手紙は、昭和21年9月1日付ので、私が帰還早々その旨を報告したのに対し折り返し御返事をいただいたもの。

第二の手紙は、昭和23年6月5日付のもので、私がある頃母を亡くしたのに対して先生の流儀による独特の書き方と内容で慰めて下さったものである。私は、直接には自己の生いたちや気持を語るることによつて、然も、そのうちに他人の悲しみに対する溢れるような同情の気持の表現された、こうした有り難い手紙の様式があることを初めて知つたのである。

この二つの手紙は、共に先生の人格や意見を知る上で実に尊い資料であると思われる——その特異な言葉使いや文章癖と共に。

第一の手紙

後藤君

何よりも嬉しい悦ばしいよ、家族そろつて無事で君が帰国したとは。定めて、実際を見、実地に此地をぬけ出して来た君たち、我等としては、とても推量に及ばぬ苦難でしたらう。何うやら私も、児孫五十人も、生命だけは苟全してるよ。それに、借家ながらも、空襲から守り了せて、従前の処に居住してる、家主からは立退き、明け渡しを催促されながらも、月々にさ。

占領軍の検閲も有る事だし、それに、此うなつての上は、未練がましく、彼れ此れくり言を述べたくないね。でも、唯一つ、戦時に上に位つて国民を号令した徒輩の無能ぶりには、愛想もこそも尽きはてたよ。それに又、戦敗後の配給当事者の、不正不義の為ほうだいさ。いかな私も、此うまでとは想像もできなかつたな。学者の卑怯な態度、官僚の不親切と怠慢ぶり、議会は旧体依然の、空談戯語に熱中して、当面緊急の諸問題には無策の無能ぶり、それに加えて工人の増長、その指導者たちの、無責任なうち、此う数へ来るともう是の上は、此う為つては、今の青少年を何とか有用有能有徳にしつける以外に途は無い、と思ふをば禁じ得ぬさ。が、それも、今の、今までの、様な教師には

能きぬしね。しかも、入学料金は、とても暴騰してるよ。

一時、私も医師から、遠からず失明する。と診断されたので、いささか狼狽して、私の東方史原稿を売りに出し、誰か買ってくれる人はと、捜したけれど、それも空頼み、でも海浜に、山上にと、自己流の養生に力めたせいか、今の所目の方は、別に悪くもならぬ、健康も手術後は、しだいに恢復して。でも、体重は手術後の十三貫余から、十貫に老衰したよ。昨今は東方史の写し直しをしてる、気の向いた時をりに。空襲時は、原稿は地方に疎開して置いたのを、今は手もとに取りもどして推敲は、いつしても、いつまでしても、自分の至らぬ、力の足りぬを見出すばかりだな、残念ながら。

のみでない。私は官僚と因習に反抗して、一生をだいなしにしたが、今にして見れば、その反抗の無力、不徹底を痛恨するのみだ。当内閣は、終戦前後の諸内閣を通じて、一番思ひきつた政治を実行し、してる、が、それでも、文部は依然だめだな。その教育刷新の為の委員の顔ぶれを見ても、殆どものの用に立ちさうのが見当らぬ。官位勲、地位月給でその人を撰び、公平を粧うて無能を諸方からかき寄せて、に過ぎぬ。アメリカ教育使節も日本の実際に暗いは無理も無いさ、が、残念でもある。

(中略) 満洲国を亡した、亡すやうに誘導した日本人ども、今となつても自省する所が有りや、と問責したいな。

何とかして、教專出身の、その後の消息を聞きたいな、中には内地に来てもりつぱに一と為事できるも有るがな。

今は、カン詰と麦粉に、進駐軍のお情に生きてる。一家親子四人三日に一人米一合そこそこで。が、ぱん食にも頗るなれたよ。

君一家も落つきを回復したら、それに食糧事情も好くなつたら、一度上京して見る気はないか、三五日は私の方に宿泊するやうにしてな。

前波仲尾

第二の手紙

後藤君

御手紙で、ただ愕然、往事を追懐してな。おりしも、アメリカから、文化的学科の、視察団が来るので、提出の草稿にと、執筆中でした。私は、罪障深い一生、人を慰める力も無いけど、その草稿をひきちぎって、その俵を、君に一読してもらはう。人生の三不幸、若くして父母に別れ、壮にして妻に別れ、老いて子に別れる。今の君が心衷、ただ往事の追懐を辿るのだ。私は、窮乏の余り、新聞人の念願を捨離して、田舎落ちした。当時母は病に臥せって三年、私の田舎下りを申出ると「然うか、あたしも、いつ死ぬか

わからぬ、危篤、帰れ、なんていはぬ、職務に精進してな」と申して、別れて赴任する。一カ月たつやたぬに、母を預けて来た弟から「昨朝、病死」を、伝えて来ました。私は、帰つて就床し、忌引した。一週間すると、「除服出仕」の命が、出た。が、何としても、出勤できぬ、為なかつた。校長が来て、出勤をと、だつた。私は、悲しくて五十何日かを引籠つた。学問の嫌いな、病弱児を、五つの歳から、なだめつ、すかしつ、父に隠しつ、父は酒狂で、学問きらひの農人で、母に入婿して来たのです。五つから四年余り、私に漢文を、教へたのでなくて、修業させたのです。玉篇といふ字引を与へて、自分で工夫して、修学させたのです。自から教へた事も無いし、私の学業を、ためしも為ぬかつた。一定の日課を終れば、それで好かつた。私はそれが、いやでよく泣いた。が、母は叱りもせぬ。なだめもせぬ。泣き止むを、じつと待つた。その間、母も食事をせぬ、私にも為せなかつた。私は前後に、漢文を、何処でも、誰にも、ならはなかつた。さて、九つの歳に、小学にあがつた。六年の課程は、三年で終了した。ただ私の出来なかつたのは、作文だけでした。私は、小学では、一つも作文は作らなかつた。試験でも。私は、漢字の困難なんか、知らずに過して来てる。此うした母親の死だ。私は、誰が、何といつても、五十幾日を、悲しみに過したな」

それからの私は、読書、乱読、飲酒、喧嘩、同僚と生徒を相手にね。酒には弱いが、何しろ酒乱の父の子でせう。発狂しかけた。一日、人力で外出すると、だしぬけに、目前、空中に、赤い血で、報復と、ドイツ語字が出現したでは非いか。当時、心に憤激してる所が有つたのです。驚いて、医院に駆けつけて云々と訴へた。医師は井上通泰氏でした。いうには、毎朝の水浴、夜具は木綿の薄綿で、敷布団は、夏の御座一枚、布団を用ひぬ事。それまで、実は盗汗で夜間一度着換ねばならなかつたのでした。私は命のままを実行した。夜の内に、風呂に水をはつて、朝起きるとすぐと、ネルの腹巻をして、水浴しました。三四カ月続いた」

が、此んな事、習慣と為つたらだめ、と、それを思立つすぐ廃止し、毎日学校から帰ると、晩食し、新聞を読んで、すぐ寝て了つた。酒をやめる為でも有つた。そして、夜十二時に目をさまし、読書する習慣をつくつた。

所が、幸にも、私の好書を憐んで、富者の子で、楽しみに書店を開業した者が、私を後援してくれた。で、私はアメリカの大出版会社 Mamilan と直取引して、多くの書をしかも、他人よりも早く読んだ。早く手に入つたので。凡を、日本もの、支那ものの、少くも壮い時の話ですが、三倍以上は読んだものです。つまり、読書の楽しみで、母の悲しみを消忘したのです。でも、母への思出は今も忘れませぬ」

でも、十三人の子女、その二人を亡くして今は、子孫ざつと五十人、その為に、かれ是れ日を過してる。今は何よりも研究、例の The East 東方の書の修成に、万事を忘れてる。満洲では、研究発表の機会を、再三与へられたけど、研究の一部をも発表せず、できなかった。発表したら殺されるからです」

「此んな、私の追懐なんか、君が現実の、今の悼亡を、如何ともできぬ事は、心得てゐるが、私の無力を如何とも能きぬ」

御存じの通り、私は不平の絶えぬ、人に知られぬ憤激の多い男です。母を亡くし妻を子を亡くして、一通り人生を過^{わた}つて来た、母の亡くなつた当分は、英、仏、独の新約書を備へて、苦悶を消し、傍ら語学を修業した。父が亡くなつた時は、仏教の書を読みました。宗教の祖師の、ゑらさを、体読し体験した。私は、何宗門に帰属しない、が、日本では、日蓮親鸞の遺書など、岩波版も有る。「叩けよ与へられむ」です。私は、母への悲しみを新約の、山上の説教で慰められたが、今読み直しても、何の感じも、今は有りませぬけど。

前波仲尾

(註)

「執筆中の草稿から、ちぎつた」というのは、別紙で、五瀬命殺害のところの弔歌である。原語と意識は略す。特に、先生のつけられた訳は、次の通り。

恩讐同帰、迷覚一如、如是因是、平等一切

(昭和31年『進路』5月号 所載)

前波先生が鹿児島や佐賀などで旧制中学校の校長をされている時の教頭で、共に新教育の推進に協力された、寺田喜治郎先生（私の満洲教育専門学校での国文学の恩師）が、私の要請で、『進路』昭和31年5月号に「血族の飛地～万葉集の謎～に問う」という題で、この問題に対する相当批判的な一文を寄稿して下さったが、その後半に前波先生の略歴や人柄や業績の一部が手際よくまとめられているので、次にそのまま転載させていただくことにする。

ついでをもつて前波仲尾さんを紹介する

寺田喜治郎

まえば なかを

前波仲尾、越前の人で慶応3年の生れ。昭和25年東京でなくなった。学歴というほどのものはない。それは貧乏な天才であつたから一つの学校にじつと止っているのが馬鹿らしくて、途中で飛出したということらしい。最後は東大の選科（法科）にちよつと居つたようである。とにかく卒業証書というものは1枚ももつていなかったのではないか。26、7の頃中等教員の免状を4つ5つとつて姫路中学を振出しに教育界にはいった。直木倫太郎・清瀬一郎などは姫路で教わつた筈である。その頃は国語の語法に興味をもち日本最初の口語法を出している。明治30年頃だと思ふ。これは保科孝一さんの国語学史にも口語法の最初のものとして明かに記載されている。前波さんは日本の文法に前人未発の見解を打立てようとして、蒙古・トルコ・フィンランドなどの語法も一応しらべた上で助詞（助動詞だったか）の研究をまず発表した。この書物はわたしも一度兵庫県竜野中学で見たことがあるが同校が後焼けたためになくなつてしまつた。しかし兵庫県の図書館か古い学校には今なお保存されているかも知れない。語法の研究から日本史殊に上代史にはいつて奈良県は隅から隅まであるきまわつた。大和から伊勢に出る長い谷あいには曾爾村というのがある。ソニというのは谷の意味だそうで、ナガスネヒコのいたところと判定した。この上代史研究は晩年の東方史なり「復原された古事記」につながるものと思ふ。姫路中学から御影師範に移つた前波さんは度々京都の社寺をたずねて日本画の変遷を研究した。明治41、2年頃鹿児島県の田舎にいて丸善から「クンスト」（だつたと思ふ）を毎号取り寄せて西洋の新しい絵を見ていたのも、そうした絵を見る目ができていたからだと思ふ。御影時代に忘れられぬのは漢文の口語読みである。漢文を文語体で読みさらに口語体に重訳する間に生ずるミスをなくすために、漢文を直接に口語で読む、前後関係から推理して必適の口語をあてる、その判断は漢文の中から用例を求めてきめる、そういういわば学問的なやり方である。明治36年御影師範を卒業した人たちは「朕おもうに」と読んでいた前波さんを今でもなつかしがっている。この響漢文というものが高等学校の教科の中にあるのかどうかそれさえ知らないわたしだから、もし読む人があつても文語で読んでいるのか口語で読んでいるのかももちろん知らない。他の外国語はすべてぶつつけに口語で訳しているのにひとり漢文だけを舌のまわらぬ佐藤一斎流に読むのはおかしい話である。前波さんの口語読みはしいて先人を求めれば五山文学の坊さ

んたちであるが、おそらく前波さんはそれらに影響はうけなかったらと思う。前波さんは英独等の言葉をマスターしていたから、その精緻な表現が漢文の粗雑な文語読みに不満をもたせたものと思われる。前波さんは貧乏で子たくさんであつたために温湯のような教育界に辛抱せざるを得なかつたが、その教育界にあつてさえ革新的な——当時の世間からは突拍子もない——ものを始終生み出した。英語教育にオラル・メソッドを入れ発音の正確を期するためフォネチック・サインを入れたのも前波さんが最初である。数学にグラフを入れたのも大正2、3年でアメリカ出版のものを翻訳しながらプリントで教えた。地理もまず実地測量・図上検討からはいつていつた。これは大正9年頃である。

前波さんは盛岡・鹿児島・佐賀あたりの中学校長として随分苦難な道をおいて後、甲南高校教授から三省堂の顧問、満洲教育専門学校の校長、満鉄囑託などをやった。最後の満鉄は松岡洋右総裁から自由な研究をゆるされたもので、この時満鉄図書館の豊富な蔵書が思う存分役に立った。「東方史」はその結果である。前波さんの長い生涯である頃くらい快適な生活はなかつただらうと思う。「東方史」の原稿は愛育研究所長の斎藤文雄博士（前波さんの鹿児島時代の教え子）の手許に保存されていると聞いている。

前波さんは一言にしていってレジスタンスのかたまりであつた。少青年時代は藩閥政府をたたき倒すために新聞記者を志して法律ものぞき漢文調の文章もつくつた。学問の道を進んでも古人や先輩に頭を下げないでいつも前人未踏の地をわれから拓こうと心がけた。前波さんは「哲学をやつて何を得たかといわれると、どんな議論に対してもいつでも反対の議論が立てられることを知つただけだ」とわたしに語つたことがあるが、反対のための反対でなくとも、結果は反対であり、その中には年月の立つとともに先見の明だつたことを証明するものが数多いのである。不幸にして近代は卒業免状一枚もたない孤立無援の天才には暮しにくい時代であつたから、前波さんは陋巷に窮死したのであり、生涯の中でもつとも力を入れた労作もまだ日の目を見ないでおるのである。もつとも「東方史」「復原された古事記」の完成は太平洋戦争中で弾圧を予想して出版できなかったのもある。後者だけは女婿豊田文一郎君が出資して少部数を秘密に印刷している。

前波さんは古事記全文がスメル語だというのである。わたしの記憶に誤りがないなら伊予の大三島神社の神官が昔からスメル語の研究者だということである。その根拠は古事記に出る神名がスメル語でないと解釈がつかないということにあるらしい。前波さんがスメル語に進んだのは「東方史」研究の途上それに興味をもつたためだか、偶然手に